



Subaru

ニュース726

'20. 2. 25

男声合唱団

「大阪のうたごえ祭典2020」開催！ -手をとろう ともに歌おう みんなの笑顔 が咲くまちへ-

2月23日



「群青 一福島に想いを寄せてー」400名の大合唱 指揮：山本恵造 ピアノ：門 万沙子

□2月23日（日）13：00～16：00 「フェニーチェ堺」大ホールにて、「大阪のうたごえ祭典2020－手をとろう ともに歌おう みんなの笑顔が咲くまちへー」（大阪うたごえ協議会主催）が開催されました。

1,000名余りの大阪のうたごえの仲間・合唱団・合唱グループが集まり、「平和や幸せな暮らしを願う想い」を合唱曲に託し、合同で歌いかわし、1,000名以上の聴衆の皆さんに聴いていただきました。 「昂」は参加合唱団の一つとして、貴重な男声部門を担う合唱団として、準備段階から積極的に参加してきました。



当日も、9:00集合で、オープニング曲「シャハンバ」、混声合唱「君死にたまふことなかれ」、男声合唱「津軽平野」そして「人として」の合唱曲に、リハーサルでそれぞれ2回レッスンし、本番に臨みました。 なお、当日の昂メンバーの参加者は全32名でした。

No.726(1/4)



3F客席で「シャハンバ」オープニングを待つ！

13:00にオープニング曲「シャハンバ」で演奏会は始まりました。昴は3F客席から、テナー伊藤さんのソロの雄叫び「SIYAHAMBA——」が大ホールに響きわたり、テナーの高音・山本宏司さんとのデュエット演奏が続き、その後を舞台の関西合唱団とPeace&Amuseの混声合唱に合わせて、昴も元気な声でうたいました。本並先生の指揮、森二三さんのピアノ。

「さあ 夢を 夢を 陽気に うたおうよー！」
「さあ 前へ 前へ みんなで進もう一 元気に
進もうよー！」

開催地・堺にちなみ、堺の歌人与謝野晶子の「君死にたまふことなけれ」に堺市出身の新進気鋭の作曲家・石若雅弥さんの作曲・指揮で、200名近くの混声合唱が歌われました。昴は男声部を受け持ち、千秋さんのソロをはじめ、熱唱しました。

男声合唱「津軽平野」そして「人として」の合唱曲では、暗譜で歌うことのむつかしさを実感する舞台となりました。特に男声合唱曲「津軽平野」は、山下政雄さんの指揮でレッスンを数回重ねてきた馴染みの曲。本番での暗譜を約束したはずが、最後のレッスンで、まだうら覚えの部分がある！何とか最後まで歌えたものの、初演？の曲を暗譜で歌うことの危うさを再確認しました。（昴13回コンサートを間近かに控え、貴重な経験の場となりました。）

(投稿)

客席から見て聴いた大阪のうたごえ祭典 2020

中谷清一

「大阪のうたごえ祭典 2020」が今回、私の居住地(高石市)に隣接する堺市で開催されました。会場は、元の堺市民会館を昨年建替え・新装されたホール名「フェニーチェ堺」で開催されるということで、何の気なしに自宅にチラシを持ち帰り女房に話したところ、数年前に古くなった堺市民会館でコンサートに行ったことがあった女房は「フェニーチェ堺」という真新しいホールに行ってみたいということで、今回は出演を諦めて私も観客として女房に同行することになりました。そんな訳で客席から昴の皆様を拝見、舞台全体を見ることが出来たということもあり、私なりに感じたことをお送りすることにしました。

幸運にも私たち夫婦の座席は前列から7列目の19番・20番。舞台正面中央のS席の少し前という最高の席で聞くことが出来ました。

<全体の舞台構成>

まず、舞台構成全体について感じたことを一口で言えば、70年余にわたり育んできた草の根運動に裏打ちされたうたごえ仲間の演奏と、洗練された専門家（プロ演奏家）、そしてゲスト出演者が何の違和感もなく見事に調和された舞台を創りあげていたことでした。しかも、数百人規模の出演者の出入り・舞台展開も司会者の絶妙な進行でスムースに流れプログラム全体が予定通りに進んだようです。休憩時間を探んだ約2時間40分には、メッセージ性も織り交ぜての中味の濃い音楽会となり、それでいてしんどさや退屈感がまったく感じさせない素晴らしい祭典でした。このうたごえ祭典のために準備された表方、裏方、出演者、そしてすべての関係者の協力と団結の賜物と思います。うたごえ運動とはあまり縁のない女房も良い音楽会との評でした。

あえて欲を言えば、最後のエンディング曲「旅のはじまり」「どこかで春が」の2曲を会場と一体で歌えるような工夫があればさらに良かったように思いました。

<輝いた“昴”団員の存在感>

この祭典での“昴”的存在感をアピールしたのは、何といってもオープニングでした。

吹き抜けの高い3階席から前ぶれなく伊藤さんのソロが始まる。それは遠い天空から聞こえてくるように広いホールに鳴り、そして山本宏司さんとのデュエットへ。3階席を見上げると真っ赤な

衣装の“昴”団員の姿が。舞台正面には前列に若者たちの軽快でのびやかなステップ、その後ろにはベテランの歌い手とジャンベ太鼓のリズムという祭典にふさわしい効果抜群のオープニングの演出でした。「シャハンバ」を初めて聴いたお客様にもインパクトがあったのではと思います。

あえてもう一つ挙げれば、堺市が生み出した歌人・与謝野晶子の詩に同じく堺市出身の石若雅弥が作曲した「きみ死にたまふことなけれ」の男声パートを“昴”団員がしっかり支えていたこと。数百人と思われる混声合唱でしたが、千秋さんのソロもよく響いていました。

<印象に残った舞台>

プログラム全体がすべて良かったのですが、あえて私の印象に残ったのを挙げるとすれば、地元の「堺すずめ踊り」と満9年を迎えようとしている福島県の原発事故に遭遇した中で創られた「群青」でした。その中でも、「群青」という合唱曲は5~6年も前だろうか、私も地元の混声合唱団でテナーパートを歌ったのですが、まだまだこの日のような感動的な演奏にはほど遠い出来でした。この日の演奏は、ひとつひとつの言葉が胸に迫るとともに、数百人規模の編成による深みを創り出し、最後の Coda 部で P ~ PP へ。余韻を残した感動的な演奏でした。

最後に“昴”的皆様、ご苦労様でした。第13回コンサートに向けて健康に留意してさらに高みを目指しましょう。

13 コンサート曲「朝露」「道」「見上げてごらん」 「U Boj!」「ゆらゆら春」「死んだ男」

2月21日

□2月21日(金) 18:00~20:30 昴定例レッスンが開催されました。

佃さん体操、吉岡さんの滑舌訓練、千秋さんのヴォイストレーニングのあと、今日は13回コンサートで歌うメイン曲（聴かせどころの名曲）「朝露」「道」「見上げてごらん夜の星を」「U Boj!」「ゆらゆら春を」「死んだ男の残したもの」の6曲を、伊藤副指揮者の指揮でレッスンを行いました。ピアノ伴奏は森二三さん。参加者は全35名でした。



(投稿)

2月24日号「うたごえ新聞」を読んで

清水恭太郎

3面に「戦争レクエム」の記事が載っていましたが、57年前に歌った曲なんです。当時大阪労音の例会に行ったとき、合唱団の募集があり、歌えるかどうか解らなかつたが、とにかく中之島中央公民館の練習場に6月中頃行きました。

1日目から4分の7拍子から練習が始まったのは驚きました。

「ディエス イレ ディエス イラ ソルベ セクル インファ ビラ」と出てきます。1時間20分の大曲で関西初演でした。会場はフェスティバルホール、大フィィル。住吉少年少女合唱団との共演でした。演奏会は翌年の3月の中頃4回ぐらい演奏をしました。出来栄えが悪いため、残って練習させられ、外へ出ると大雪で電車が止まり、帰宅出来なかった人もいました。団員が250人いてその人たちを引き止めるため、年末第9演奏会を始めたのが、恒例の年末の第9演奏会の始まりなのです。

その後は、夏は「ベルディ」「モーツアルト」などのレクエム、冬は第9演奏会が定着したのです。私は大阪第1合唱団・フロイデ合唱団に所属し、週2回の練習に行ってきました。子供が双子でしたので、5年ほど合唱とは無縁の生活でしたが、今に至ります。



No.726(4/4)